市民俳歌柳壇

俳壇　星田一草 選

一人居の箸の重さの炎暑かな

●江曽島町　長谷川　昇

◎選評　今年の夏は特に暑さが厳しい。何をするにも物憂さを感じる。「箸の重さ」の措辞より暑さの中での気だるさが、また、つつましい一人だけの食事に孤独感が包含されている。「炎暑」なる季語が句全体を支配し、作者の心境がまざまざと思い浮かぶ。

朝七錠服薬のまま秋に入る
峰1丁目　郡司　紀子

丁寧に形見の硯洗ひけり
野沢町　渡辺　明広

来客の帰りて寂し蝉の声
駒生町　駒場　幸子

売り家に咲き残りたる花木槿
中今泉5丁目　丸田　守

歌壇　安野登美子 選

日々起こる由無し事の端々を日記のやうに歌に紡ぎぬ

●下田原町　五十嵐由美子

◎選評　日々とりとめのないことごとを丹念に日記に書き留めておく。「由無し事」は思わず口をついて出た言葉であろうか、実感の重みがある。「歌を紡ぎぬ」繭から繊維を引き出した糸が織物に完成。この工程を巧みに歌に取り込んだ結句に力量を感じる。作歌のありさまの中に身を置き、ここに作者ならではの独自な歌が成立した。

小田代の笹原に立つ貴婦人は
孤高を持する男体山を背に
清原台5丁目　北市　邦子

陽の残る畦道ゆけばさわさわと
穂孕む稲のかすかな吐息
下岡本町　高尾　信尚

千の風ならずも君は何方か
戦友の墓処に蝉時雨降る
今宮2丁目　赤城　恭平

辿りつく山門くぐり浄土の地
静けき中に杖の音のみ
峰1丁目　小林　富子

柳壇　荒井宗明 選

ケアハウス三人寄れば齢のこと

●弥生1丁目　小澤　幸雄

◎選評　人は生まれながらにして、競い合う本能的なものを持っているようである。その最初が学校であろうか。小学校から大学まで、その成績を競い合い、勤めの中では、そのポストを争う。また、隣が新車にすると、ワンランク上の車にするなど、果てしない競争が続く。

曼珠沙華墓原道となりにけり
城東1丁目　綱川　光江

万歩計ベルトの穴は動かない
中岡本町　竹内　孝彦

賞味期限明日かも知れぬ齢の数
東塙田2丁目　渡辺　眞左

スニーカー日陰を拾いつつ帰る
下栗町　大塚　榮子

文化・教養・スポーツ

うつのみやの　ひもと　歴史を紐解く物語

第6回　徳川将軍も泊まった　華やかな城下町　うつのみや

■**徳川将軍が宿泊した城**　江戸時代に徳川幕府が開かれ、日光に初代家康を祀る東照宮が造られると、将軍家による日光社参が行われるようになりました。その規模は、8代将軍吉宗の場合でみると、行列の人数が約13万人、人足が約22万人、馬が約32万頭という大行列で、幕府の権力の強さを示す大規模なものでした。その社参の際に、将軍の宿泊所として宇都宮城は使われました。

■**釣り天井伝説**　宇都宮城には、徳川将軍の宿泊にまつわる伝説があります。宇都宮城主であった本多正純が、徳川家康の孫である駿河大納言忠長を3代将軍にしようと考え、日光社参のため宇都宮城に宿泊する家光を釣り天井で暗殺しようと企てますが、事前に計画がばれてしまい、失敗に終わるという話です。この物語は史実とは異なりますが、1622年に2代将軍秀忠が日光社参の際、往復とも宇都宮城に宿泊する予定が、急に帰り道の予定を変えて宇都宮城を避け、江戸に帰ってしまい、その後、正純は宇都宮城を取り上げられてしまったことが元となっています。この話が後に講談や歌舞伎の題材として脚色され、宇都宮城を舞台とした「宇都宮釣り天井事件」として世に知れ渡ったのです。

▲宇都宮城址まつり社参行列

■**市民の憩いの場　宇都宮城**　この宇都宮城は、高度経済成長期に一部を残し、埋め立てられてしまいましたが、平成19年に宇都宮城址公園の再整備により、現在の姿に生まれ変わりました。毎年10月には、日光社参を模した社参行列などを行う「伝統文化と歴史の祭典　宇都宮城址まつり」を開催するなど、今では市民に親しまれています。

問文化課☎(632)2764

ページ番号を市HPのトップページで入力してみよう。関連ページが見られるよ。

◎**俳歌柳壇　応募方法**　1人に付き俳句3句、短歌3首、川柳3句以内。対象は市内在住の人で、未発表作品に限ります。はがきに、作品（漢字にはふりがなも付けて）・住所・氏名（ふりがな）・応募する壇名を書き、毎月20日（消印有効）までに、〒320-8540市役所広報広聴課へ。俳句・短歌・川柳の併記は不可。市内に在住か通学している小・中学生からも応募をお待ちしています。問広報広聴課☎(632)2028